

守備部隊は食糧欠乏に悩まされながらも築城の強化に努め、岩盤掘削による幹線坑道延べ四、五〇〇メートルと対戦車壕（幅六メートル、深さ二メートル、延べ二千メートル）を完成し、また築城資材としてマンガローブ材約十三万本伐採使用した。このころまでに栄養失調による死亡者が多数出たが、四月以降は甘藷等の収穫が逐次増加したため栄養失調患者も次第に減少した。現地自活も製塩、製麻、魚肉燻製などの生産に成功し、その他椰子ミルク、蜜、油、煙草なども生産されるようになった。労働力として、数千人の現住民を雇用した他は同島西海岸に疎開させ、軍との接触を断ったので問題は起こらなかった。

米機の来襲も昭和二十年六月以降は偵察機が毎週おむね一回飛来する程度に減少したが、同島進出以来終戦までに受けた空襲は、延べ四三万機以上に達した。同島は米軍の進攻を受けることなく終戦を迎え、守備隊は同年八月十七日十八時をもって戦闘行動を停止し、歩兵第一〇七連隊は八月二十一日、軍命令により軍旗を奉焼した。

九月八日五時、マーシャル・ギルバート方面最高指揮官代理は駆逐艦二隻でクサイ港に入港し、原田中尉と同艦上において降伏調印式を終了した。在島陸海軍部隊は復旧作業などを実施しながら歩兵第一〇七連隊主力一、三一五名（内患者九五名）は十一月五日病院船「氷川丸」「高栄丸」によりそれぞれクサイ島港を出港し、同月十三日、浦賀港着復員下命、一月十六日召集解除、無事帰郷した。

## 僚友は玉碎

### パラオ本島の戦い

栃木県 佐々木 由一郎

私の所属した第十四師団歩兵第五十九連隊が南方方面作戦参加のため動員令が下りたのは昭和十九年三月一日であった。満州国龍江省蕭々哈爾からの移動であり、二十五日、旅順出港、四月一日、門司港出帆、同三日、横浜港に入港。久しぶりに故国の山河や町や港

の懐かしい風景に接して、千葉集館山を出港。日本に生まれ二十一年間、種々の思い出が走馬灯のように浮かんでは消え、消えては浮かんだ。

昭和十九年四月二十四日、目的地南洋群島西カロリ  
ン諸島のなかのパラオ諸島のコロール島に着いた。以後の状況については、既に体験談として述べておるので重複する故、今回はパラオ戦後期の、連合軍包囲下での苦闘についてお話をしたい。昭和十九年七月二十九日、アンガウル島に、我が歩兵第五十九連隊一個大隊を残し、パラオ本島に戻り警備に当たることとなった。

八月九日、転進を完了し、各隊は逐次示された拠点に進出し、八月十二日、軍旗を五一三高地に進め、宿舎をジャングルで飲料水のある所に建設、翌日、防空壕や蛸壺陣地の構築等休む暇さえなかった。陣地は主として海軍から二、三キロ離れた地に布陣し、アイライ飛行場を中心とし、敵上陸に際してはいつでも出撃できる態勢をとった。今までの空襲は夜間のみであったが、八月二十五日からは、白昼堂々と銀翼を連ねた

コンソリゲーターD24が来襲し、爆撃を繰り返した。時たま我が軍の高射砲の直撃を受けて四散墜落する敵機を見て、我々は歓声を上げたのである。

九月六日、東南方面から敵のグラマン艦載機約三百機という予想せぬ数が、兵舎のあるジャングルを頭上から攻撃し、アイラム飛行場に爆弾を投下、港湾、高射砲陣地などに猛烈な銃爆撃を加えた。翌七日も同様であり、このように日増しに空爆の激しい中であつて、昭和十九年末ころになって食糧事情が悪化してきた。

昭和二十年に入つてからは極度にその度を加え、兵隊の体力も目に見えて低下、栄養失調のために衛生隊に収容される者、あるいは兵站病院に護送される者も日を追つて増加した。

当時の食糧は誠に微々たるもので、わずか茶碗一杯の米と、時折コロール島方面で採れたという食用蝸牛が唯一の蛋白質源で、これに甘藷の葉を混ぜて食べるのが常食であつた。このような給与状況の中で、いかに精強を誇つた我が部隊といえども、精神力のみでは致し方なく、栄養失調による死亡者や、休養者も日ごと

に増える一方であつた。

わずかな給与では、血気盛んな若い兵隊たちの胃袋や体力が保てるはずはなく、体の丈夫な兵隊は訓練や勤務の合間を見ては、付近の山や川を捜して木の実や野草、木の芽、その他有毒と判明している物以外、手当り次第すべて食用に供し、ねずみ、とかげ、蛇など、見付けた者は先を競って捕らえて食べたのである。川では小魚や川えびを採って食べ、体力の維持管理に努めたのであるが、このようにしても、あの頑強な若い兵隊たちも頬はこけ、肉は落ちて眼だけが鋭く光る有様で、歩行するにもよろけて、まるで骸骨が歩いていくようであつた。

有事に備えてこの戦闘力の低下は覆うべきもなく、気力、精神力のみでは敵の来襲に際しては誠に氣遣われる状態であり、上層部はここにきてようやくこの窮地解決のために自活以外に道はなしと決意した。

これがため、漁労班を編成したが、その作業の方法は、素人には想像もつかない。爆弾の黄色火薬を抜き取り、ビール瓶に詰めて、手榴弾の信管を取り出して

導火線を差し込んで手製の爆弾を作る。漁労班は小さな舟に四、五人で乗り込み、一人は絶えず泳いでおり、魚の群れを発見すれば直ちに舟に上がり、すかさず爆弾の導火線に点火して魚の群れの中に投げ込むのである。この間何秒かの仕事であり、導火線も短いので一秒でも舟に上がるのが遅れると、自分で仕掛けた爆薬で自分がけがするか、間違えば犠牲になる場合もあるので、その瞬間は真剣そのものである。魚は一度は浮上するが、数分たつと沈んでしまう。爆発の衝撃で魚の浮袋が破裂しているからである。

海の深さはまちまちで、浅い所でも五、六メートルもある。深い所は二〇、三〇メートルある、であるから沈んだ魚を引き揚げるのがまた一苦勞であり、海に馴れない我々素人には不可能である。そのため、漁労班には現地徴集の沖縄県出身の兵隊を含め編成したのである。彼らは三〇、四〇メートルも潜って、一分間以上も平気で作業してくるのである。まさに、訓練というものは、いつ、どこでもその力を發揮し役立つものだ。兵隊もまた、この窮地に立ったときに、その修

業の尊さを思い起こしたことがある。さらに思うことは、何も知らない農家育ちの我々が生死も分からぬ窮地に追い込まれて、生きるためとはいえ苦しまぎれに漁労班の一員とし、毎日、毎日敵の戦闘機を目をくぐり抜けて採った魚や貝類が、隊員の体力回復に、戦争続行のために何程役に立つか、何人の戦友を救えるか、常に思い浮かべながらの作業であった。しかも、漁労班の仲間は空襲、機銃掃射の合間を縫っての作業で、常に生死の間で作業をした。軍隊という別社会の中に籍を置くからには「上官の命令は朕が命令」として服従しなければならず、体力と気力の続く限りその任務に忠実でなければならぬ。中隊に残っていれば毎日ジャングルの中にある兵舎の中で、あるいはその付近において消耗いちじるしい体に鞭打ちながら、銃剣術や蛸壺掘りをしている。それに比べると漁労班員は毎日楽しい日々であったことは間違いなかった。

パラオの海は内地の海に比べると想像もつかぬほどきれいで、水面から三〇メートルも四〇メートルも透き通って見え、多数の熱帯魚が泳いでいて、まるで小

学校で習った竜宮城のようであった。海底には色とりどりの珊瑚が重なるようになって生存し、まさに絵に書いたようで、日本の海では見られぬ壮観さである。

蛸や貝を採るときは引き潮のときが多く、蛸壺を見付けるには、蛸の好物である貝や、蟹などの殻が周りに散乱しているので分かる。蛸も蟹もそれぞれの生き方があるが、人間の生きるための生贄となるのである。我々軍人としても、いつ、どこで天から与えられる生命が終わるのかと、思わぬ者はなかったであろう。蛸採りはなかなか難しいが、これを採るには蛸との長時間の闘いがあり、蛸の足が蟹に切られても、また成長していくことを現地人から教えられ、生命の強さ、生存競争の厳しさを知ることができた。しゃこ貝は美味で栄養あるものだが、これを採るにも長時間の努力が必要で、漁労班の苦労はなかなかのものであった。

食物が不足するのは魚介類のみではない、糖分も不足すれば塩分も不足する。何から先に補っていくか分からない現況の中で生きていかねばならぬほど心細いことはない。南方地域の糖分は椰子の若芽であるが、

住民の財産である椰子は切り倒してはならぬと、軍からも言われていた。しかし、若芽は切り倒さなければ採れぬので盗んでしまったこともあった。また糖分の補給源は野生の砂糖黍で、これが我々の唯一の望みでもあった。

人間生きて行く上で糖分よりも欠かせぬものは塩分である。パラオでは塩分は海水から採る以外にはない。海水はいくら豊富でも、そのまま飲むわけにもゆかず、ある程度の加工が必要である。しかし、加工といってもパラオは戦場の第一線であり、容易ではない。夏のパラオは常に三〇度を越す猛暑であり、体から吹き出す汗が結晶になる。それを集めて嘗めて塩分を補給したことも何度かあった。

そこで始めたのが製塩所であり、漁労班に併設実施したのであるが、これが大変な仕事であった。何といっても難しいのが製塩所の場所の選定であった。戦争は既に負け戦であり、制海、制空権は敵側にあった。兵隊一人の行動ですら思うように動けないときに、火を燃やして、煙を出しての作業など到底できない話だ。

しかし、これも命令があり、これを実施しなければ隊にいる戦友の体力が一層衰え戦闘能力がなくなるので、万難を排しても実施すべきである。上官の命は朕の命令、従わざるを得ない。

漁労班一同は覚悟を決めてその作業に当たることとなった。まず第一は製塩所の場所の選定だ。製塩には、まず火を燃やさなければならぬ。二番目は海水をくまねばならぬ。三番目には何といっても敵機に発見されぬ所。四番目は、不幸にも敵機に機銃掃射されても直ぐに姿を隠せる所。こうなると適当な場所もない。

現在の漁労班の場所が最高の場所であっても、海水をくみ、火を燃やすとなると班員一同顔を見合わせ真剣そのものである。しかし、中隊からは一刻を争うことであると強い要求もあり、適当な場所を選んで作業に入った。

しかし、何の資料もなく経験もない素人ばかりで、どこから手を付けてよいかも分からない。議論百出、ようやく話がまとまり、海水をくむ容器には航空燃料の入っていたドラム缶を利用する。ドラム缶を縦割り

にして二本作り、一本はそのまま使う。他の一本は平らに伸ばして一枚の鉄板の角々を曲げて船を作り、二つの爐を石で積み重ね、二つを並べて乗せる。海水を滿杯にくみ込み火を燃やして煮詰める。製塩の原始的作業である。現在はそれ以外には何の方法も術もなく実施したのである。一回を煮詰めるのに約半日かかり、火を燃やし続けてその収穫は一回で四キロくらいしか採れない。

その作業の結果は量の問題ではなく、生活に欠かすことのできない戦用食であり、兵隊の体力保持、戦闘能力維持確保のための、いかなる苦勞、危険が伴っても日夜交代で作業を続けなければならなかった。

作業を続行して三日目の午前十時ころ、ついに火を燃やしていた煙が敵の偵察機に見えられたと思った。

わずか一時間もたたぬうち艦載機の爆弾投下と銃撃を受けて、折角苦勞算段して作った製塩所は一瞬にして跡形もなく吹き飛んでしまった。幸いにも我々はこの事を予測して、近くの防空壕に全員飛び込んだので無事一命は助かった。

我々製塩所とわずか二〇メートルくらいしか離れていなかった所で、同じ製塩をしていた海軍の兵隊が逃げ遅れて、三人とも吹き飛んでいました。余りにも一瞬の出来事であったが、その凄まじさは言葉では言い表せぬもので、飛行機が去り爆音が消えても落ち着かず、足元が震えて立つてはられないほどであった。今になつても当時のことを思い出すと、何とも言いようのない気持ちになることもある。

そして、元通りの平穏さを取り戻して、吹き飛んだ海軍さんの製塩所のあつた所へ行つて見ると、跡形も無い。爆弾の恐ろしさと、その威力にはただただ驚くばかりであった。そして、数十分前まであのように元気で笑っていた三人の海軍の兵隊たちの姿はいったいどうなつてしまったのかと、辺り一面を隈なく捜して見たが何一つ見付からなかった。場所を変えて捜したところ、ちょうど製塩所の裏山にあたる、非常の場合の避難場所として掘った防空壕の高さ五メートルもある台地の叢の中に三人の遺体が、バラバラにちぎれて足の踏み場もないように散り乱れていた。

この生々しい現場を見て、その悲惨さに佇むほかなす術もなかった。さらに悲惨にも、その飛び散った肉片には南方特有の銀蠅が真っ黒にたかつて肉を貪っている。何という無惨さであろうか、これが戦争の実態であることは、体験者のみか知るところであるが、人生の定めなのかと忘れることができない。

我々はその残酷極まりない実態をまともに見たが、その作業を止めて引き揚げるわけにはいかなかった。もし、我々が与えられた任務を怠り、製塩作業を放置すれば、塩を必要とする兵隊の体力と戦闘能力に著しい影響を与えるのは必定で一刻の猶予も許されるものではなかったので、直ぐに次の準備にとりかからなければならぬ。

しかし、一度敵に発見され、攻撃された場所で作業を続けるわけにはいかず、場所を変えて新規に作業を進めることとし、そこを引き揚げて場所を選んで、再度製塩作業と漁労班とを併設して戦力保持のために全力を尽くしたのである。しかし、製塩は海岸で危険度の高い所であることを覚悟の上で作業を進めたのであ

った。しかし、時既に戦況は我に利あらず、敵軍は日ごとにその量を増し、我々は空も海も完全に敵の包囲下にあり、陸上でも日中は安心して歩行することさえ危険な状態になってきて、経理部に食糧受領に行くのも夜間に行く有様であった。再建した製塩所も十八日目には敵に発見されて、爆撃と機銃掃射を受けたが、今回も幸いにして助かり、作業にも支障なく難を逃れることができた。その後何度となく銃撃を受けながらも、覚悟を決めて作業を続行して、魚と塩とを十分とはいえないが、中隊本部に送り、兵隊の体力の維持にその役割を果たしたのである。

その間、本隊の状況はどうであったか、パラオ地区集団上陸当初の給与は一カ月間は陸軍軍事定量の支給があったが逐次低下し、野菜類などは海軍水兵さんと比較すると、我々のはその四分の一まで落ち込んでいた。元々同じ軍人であっても海軍の給与規定と陸軍の給与規定にその差があることは知っていたが、第一線の戦争区域で、まして海軍も上陸すれば、その給与等においても、陸海同じにすべきであろう。まして、こ

の緊急事態の中で、片方は腹一杯で満足し、一方は栄養失調で歩行困難という状態。一朝有事に際し、協同作戦にその影響があるは必定である。

部隊本部においては、現地自活行動と相俟って戦闘能力向上に努め持久態勢を整えていったが、まず主食の代用品として作付けしたのが甘藷、タピオカとし生野菜も百グラム確保に全力を尽くした。しかし、米軍機の激しい空爆により、戦用糧秣集積庫は爆破されるなど被害を受け、植え付けをした甘藷にはバイラス病が発生、燃料や爆薬などの不足による作業不振。特に二十年に入ると食糧事情は急激に悪化して、新たに農業生産隊を編成して増産に努めたが、全戦闘員を満たすような成果はあげられなかった。

また、その環境は、ジャングルに生活、栄養失調、高温多湿、給排水系統の不備などから、パラチフス、アmeerバ赤痢等にかかる者多数が目立ち、その最高疾患率は全体で、パラチフス、アmeerバ赤痢が約三・五パーセント、脚気が約二五パーセント、栄養失調一五パーセントと、諸病が続発する有様であった。これら

に必要な衛生材料というと、戦闘薬剤の用意は多少あったものの、到底物の数ではなく、緊急な現地調達も成果なく、病死する者が日増しに増加した。明日は我が身と、迫り来る不安を感じる日を送っていた。

食糧事情悪化は置くとしても、我が部隊の悲惨さである。ペリリュー島とアンガウル島の玉砕が確認され、悠々と飛来する米軍機、島々の間の水道に多数の敵艦船が集合して肉眼でも望見されるようになった昭和二十年正月。この取り残された孤島での正月に少量のタピオカ餅が配られた。このころの食糧は一食盃一杯の米となった。そのような中で出撃訓練や斬り込み、対戦車撃等の訓練が続き、もしも敵が上陸して来れば必殺の闘魂を燃やしていた。しかし、ほとんどの兵隊が脚気や栄養失調で餓死するという悲惨な状況になっていた。

兵隊の症状は初期のうちにはだんだんと痩せ衰えてきて記憶力が減退し、何をするにも億劫になり、根気が衰えてくる。朝起きると目が回ってしばらくは立つことができず、じっとして静かに立ち上がって、朝の点

呼にはよろけながら出るといふ状態であつた。

椅子に少時間座つていてもたちまち足がふくれてくる。そうなると激務休の診断が出る。更にそれが進むと全身浮腫となり小便が出なくなり、腎臓病のようになる者も出てくる。更には急に痩せて骸骨のようになり、二十三、四歳の働き盛りの若者でありながら、七、八十歳の老衰者のようになって杖を使わぬと歩けない。幾百の兵隊の体重は四〇キロ台となり、血圧も、上が九〇以下となり、その大便是腸を溶かしたような、どろどろと鼻汁のような物が出てくる。当時、国軍随一を誇り、精鋭中の精鋭の現役兵が、次から次へと戦わずして戦没していったのである。

それら患者の死期はだれが見ても分かつた。死相が表に現われて、ほぼ順番どおりに朽木が倒れるようにして死んでいく。また、寝ていて話をしながら、事切れて行く者もあれば、隣の戦友の脈をとりながら、自分が先に死んでいった者もいた。戦後、中隊の戦没者名簿を見たら、その病状、死因は次のとおり記載されていた。

細菌性赤痢、脚気兼急性大腸炎、脚気兼アメーバ赤痢、脚気兼右胸膜炎、黄疸出血性、スピロヘータ、脚気兼肺結核、脚気兼心臓弁膜症……………。

様々な病名で死亡が確認されており、中には有毒と知りながら毒抜きをせず、猛毒素を持った物を食べ死亡した者もいた。他には空腹に耐えられず手榴弾で自決する者もあり、部隊では一カ月間に百名を超す餓死者が出るという現況で、現地自活農耕作戦を新たにした。

大隊や中隊ごとに農耕のほか漁労班、製塩所を増設し、野菜収集班、蝸牛収集班などを増強して食糧の確保に万全の策を講じたが、何といつても限られた島で敵の空軍の目を盗んでの作業で思うとおりの成果は得られず、ましてや、人跡未踏の原始林を伐開して食糧を作るといふことは簡単なものではない。やつと畑を作つて甘藷や、南瓜を植えても収穫には早くとも一カ月半、二カ月とかかる。まして、ジャングルは大木と共に洋菌類が茂つていて素人の手で大木を切り倒すことは並大抵の仕事ではない。

伐採用道具はない、太い木を切らず残せば日照関係で作物の生育が悪くなるので、とにかく切れるだけ木を切つて畑地を作る。掘りやすい所を掘つて苗を植えるほか手はない。直径一メートル程度円形を掘り、腐った木の葉と人糞を混入して堆肥とし、土を盛りそこに苗を植えた。

植えた苗は高温多湿の土故、甘藷も南瓜も、どんどん蔓を四方に伸ばす。伸びた所は耕す必要なし、この作業は隊員全員の作業ではなく、身体健康な者だけの作業である。同じ給与を受けている者の作業が長く続くわけがなく、働く兵隊の疲労は極限に達した。伸び始めた甘藷の葉と木の芽、草の根に少々の米粒の塩気のない雑炊では気力も出ない。

兵隊たちは何も考える余地もなく、ただただ、自分のため、生きるため一生懸命頑張っているのだが長くは続かない。作業場から下山する者が日増しに多くなってきた。

六月ころになって、沖縄の戦局は進捗せず、米軍機からの宣伝文がバラオ全島に投下散布されたのは、こ

のころであつたと思う。そして、飛行機からは予科練の哀調をもよおす歌が流されたのもこのころであつた。このようにして幾多の苦難と犠牲を克服し、二カ月間を要した農耕作戦は完了した。しかし、その収穫に至らぬ前に終戦となつた。

米軍に制海、制空権を握られ、島に閉じ込められて餓鬼となり、飢えに追いつたてられたことを、今思えば夢の彼方のようなものである。人間環境の変化により、ああも変わるものか、動物的本能になりさがり、古い言葉に「武士は食わねど高楊枝」というが、水ばかり飲んで生きられぬ。食わんとする欲望。それは生きたいという事に通ずる。その欲望を抑制できるとすれば、死を認めて己を制する理性の強固な者だけではなからうか。一軍人として一日も長く生き、いや、一週間も長く生きて、国家のため、国民のための戦力になるという安心感の方が遙かに大きかつたのである。

今更自己弁護しても仕方ないが、常夏の国は平和であれば、椰子の葉蔭にたわむれ、珊瑚礁に砕ける白波を眺め、パイナップル、パパイヤなどの果実に舌鼓を

打ち彼女とささやき、働く必要もない環境、恥さえ捨てれば裸で住める。食糧は果実で十分取れ、住は椰子の葉を利用し一日か二日で建てられる天国に等しいパラオであった。

しかし、戦時下は既に椰子の木は倒され、その茎まで食べ尽くし、バナナ、パイナップルは掘り起こし、その根までも食べてしまった。あらゆる物を口にほうり込む。しかし、人間は牛や馬ではないから胃袋が受け付けない。常時、敵機は頭上を旋回し、機銃掃射を雨のように浴びせる。これも馴れてしまうと、機銃も爆弾もさほど恐ろしく感じず、本能がそれを知り自然に身を避けるようになり、食を求めることにその日の大半を費やし、まるで原始時代の人間に戻ったような生活である。赤い大きな太陽は水平線に没し、周囲は夕闇に閉ざされ、天を仰げば南十字星が瞬き、自然に頭は北に向かい北斗七星を捜さんとして遙かに故郷の思い出にふける。家族のこと、母のこと、彼女のこと、そして初めて宇都宮の兵舎に入って、兵舎を後に外地に出発する前、初めての面会が許され親兄弟が持参して

きた大福餅やばた餅が目の前に積み重ねられていたこと。

しかし、このころの戦況我に利あらず、刻々と迫る足音は敗戦、暗い絶望的な足音であり、当時は知る由もなかったが、八月六日広島原爆、続いて長崎。八月八日ソ連の満州侵入。八月十五日終戦詔勅。

連合軍の現地軍との具体的諸問題についての要旨は次のごとくであると後に聞いた。

いまだ現地には数千名の軍隊がいる。間違いを起こさぬようパラオ島に集結したい。集結後は将校、下士官、兵であり、これらは皆、捕虜となるより死を好む者ばかりである。死ぬことを軽く考えることが恐るべき結果となる。糧秣は十分に食べさせるには十日分しかない。漁労を認めて欲しい。兵器は渡すが将校には軍刀。拳銃を。兵には帯剣を持たせて欲しい。早く帰還させたいが、長期間になろうから自治を許して欲しい。

我が部隊はこのような申し入れをし、九月二十一日から、兵器・弾薬の引渡し。危険物の処理、港湾施設

の補修、戦後清掃、食糧増産等を実施した。

戦闘序列が解かれたとはいえ、軍律正しく誠意をもって処理に当たった。これがため、ロジャース將軍をはじめ米国関係者に敬意の念を抱かせた。また、現有船舶ではいつ帰還できるか見通しがつかぬため、食糧増産に力を入れ、新日本建設の心構えということ、連隊週報「新日本」を発行したりもした。

しかし、急遽、米軍LST（上陸用舟艇）により帰還が決定し、十月二十一日、まず第一陣として、傷病者、邦人らの内地帰還が行われた。第二次は五六七名が十二月二十四日、パラオ発内地に向かう。以降は編成により連隊長以下五五〇名をもって、「コロール」パラオで一番の繁華街の崩壊物清掃作業に当たった。作業隊員の選考も厳しく、各隊最健康者にして志操堅固なる者をもって充当したということであった。

私は奇しくも作業隊員に選ばれ光栄の至りであった。そして、その作業ぶりは米軍に畏敬の念を抱かせたという。死をかけた戦地の仕事に有終の美を発揮し、安堵の胸を撫で下ろし、作業も一段落をし、いよいよ内

地帰還の日が知らされた。

昭和二十一年二月九日、部隊の最終引揚げ隊員として乗船し、コロール波止場から出航した。国軍随いを誇った精鋭部隊、宇都宮第十四師団歩兵第五十九連隊、激闘と食糧不足により斃れた幾多戦友が眠るパラオ、必ず迎えに来ると、両手を合わせて祈り口ずさんで、生命の極限まで経験し耐えたこの島に、だれもが感無量の涙で別れを告げたのである。

帰国後に分かったことであるが、防衛庁戦史室編、陸軍作戦パラオ篇の末尾に記載されている。

「パラオ地区の現地島民は日本の統治に感謝し、日本人の引揚げに当たり多数の人たちが涙をもって見送ったのである」

昭和二十一年二月二十七日、夢に見た内地の浦賀港に入港して復員完了まで、階級章を付け、週番肩章とラッパをもって、平時軍隊生活そのままの姿だ、さすがの復員局も驚いたという。

昭和二十一年二月二十二日朝、解散式により歴史ある歩兵第五十九連隊史の幕を閉じたのである。